

Herman Melville の宗教的影響について (4)

Moby-Dick と Calvinism

岡本雅夫

岡山理科大学教養部

(1990年9月30日 受理)

はじめに

本論は、本紀要第25号(B)に掲載された同題目のものに連続するもので、Moby-Dickに見出されるMelvilleの宗教的影響や、その背景となるCalvinismを中心とする宗教的思潮などについての考察を進めるものである。前回では、Thomas Walter Herbert Jr.のMoby-Dick and Calvinism: Part TwoのVI The Dignity of Manまでを取り上げたので、今回は、それに続く章、VII Ahab Reprobate. VIII The Infidel's Cosmic Resentment, IX Ahab Transfiguredの一部、を順を追って読み、Herbertの展開するMoby-Dick論を要約し、Melvilleの宗教的影響についての考察を進め、Melvilleの全体像を理解する手立としたい。(本論は、T. W. Walterの原書を和訳した部分に『…』を付けて要約している。「…」は、同書中の引用箇所であり、〈…〉の小見出しは、内容要約上の便宜によって、筆者が付した。)

神に見放された人、アハブ (Ahab Reprobate)

T. W. Walterは、これまでの章で、MelvilleがCaptain Ahabを登場させる意図を次の様に述べている;『Melvilleは、カルビニズムの正統派(orthodox)と改進黨(liberals)の間での論争のテーマの中に現われた偏執者と不信仰者(bigots and infidels)を、Moby-Dickの主演を演ずる人物に採り上げ、theocentric authorityに根本的疑問を突きつけ、それを糾弾している。……Ahabの抱く目的の強烈な偏執性と、Ishmaelの変動する懐疑主義とを並列するが、これはtheocentric authorityの概念を糾弾するためである。』¹⁾『Ahabを神の悪(God's evil)を認識する狂気(madness)の英雄的具現として示しながら、そのheroismが、次第に怪物じみてくる(monsterous)ことを明らかにする』²⁾、『Ahabの探求に、神と人間の道徳的關係についてのカルビニズム正統派と改進黨の論争の核心に至る様々な意味を与えている、つまりMelvilleは、怒れるCalvinist Godが支配していると思われる世界の中での人間の尊厳の運命を探るために、Ahabを使うのである』³⁾

この章では、T. W. Herbert は、Captain Ahab が、Calvinism が定義する Reprobate（神に見棄てられた者；神による救いを拒否された者）として描かれていることを指摘し、Calvinism の motifs の一つである Reprobate についての様々な見解や、正統派、改進黨それぞれの主張を挙げて、Melville が Captain Ahab に与えた意味を探っている。Captain Ahab が読者にその名前と存在を知られるのは、Ishmael が乗り込むことをきめる Pequod 号で、その船長の名前を尋ねた時だが、T. W. Herbert は、Captain Peleg と Captain Bildad の激しい応酬の中に、Captain Ahab の怒りの意味が含まれるという主張で、この章を始める。

<Ahab's cosmic fury>

『Bildad の名前は、ヨブ記1に出てくる敬虔な慰め人 (The pious comforters) の一人を思わせる。ヨブの苦しみは、神の正しい罰によるものに違いないという理由で、ヨブに犯してはいない罪を告白せよと迫るのであるが、Captain Bildad も同様に、Captain Peleg に、恐るべき神の裁きのことを口にして相手を怯えさせる。

“as thou art still an impenitent man, Captain Peleg. I greatly fear lest thy conscience be but a leaky one, and will in the end sink thee foundering down to fiery pit! Captain Peleg!” (“The Ship” p.75)

（お前はまだ悔い改めていない人間だな、ペレーグ船長。だからお前の良心には漏れ穴があいているんだ。終には火の燃える地獄へ、お前を投げ込むことになるぞ、ペレーグ船長！）これに対して、Captain Peleg は答える。

“Fiery Pit! fiery pit! Ye insult me. It’s an all fired outrage to tell any human creature that he’s bound to hell.” (“The Ship” p.75)（火の燃える地獄だと！ お前は俺を侮辱してるな。神の被造物たる人間に向って、地獄へ必ず落ちると言うのは、恐しく無礼の極みだ！）

この遺取は、後で Peleg が Ishmael に、Captain Ahab と自分とを比較して話す時に、その内容を持つのである。

“I know what he is — he is a good man — not pious, good man like Bildad, but a swearing good man, something like me.”

（“The Ship” p.77）

（俺はアハブがどんな人間か知っている。奴は善人だ。だがビルダッドのようには敬虔で善人というのではなくて、呪いを口にする善人だ、俺みたいに。）

『Peleg が Bildad に向って激しく怒鳴るのは、Captain Ahab の壮大な怒り (cosmic fury) を予示するものであり、Ahab はこの‘bound to hell’が意味する中味に怒るのである。自分が“地獄行きを宣告されること”の無法さ (outrage) に気付いて、Ahab はその無法さの持つ様々な意味に取付かれる、そしてその結果、彼の本性 (nature) の全てが、形而上的反逆 (metaphysical revolt) に吸収されるのである。

“Gifted with the high perception, I lack the low, enjoying power: damned, most subtly and most malignantly! damned in the midst of Paradise!” (“Sunset” p.147)

(高尚な事に気付く力はあるが、下等な、楽しみを味う力がない。地獄行きを宣告されているのだ、極めて陰険で、悪意のこもったやり方で。楽園の中に居て、地獄行きの宣告を受けてしまうとは!)⁴⁾

<Mapple’s Jonah and Captain Ahab>

『Melville は、地獄行きの宣告を受けてその陰険で、悪意のこもった無法さに怒りを向ける Captain Ahab と、Mapple 神父の説教に出てくる Jonah とを入念に対比させるのである。鯨の攻撃を Jonah は神の懲らしめ (God’s correction) と受取り、Ahab は壮大な侮辱 (cosmic affront) と受取る; Jonah はその恐ろしい力 (the dread power) に恐りの余り屈するが、Ahab は、止むことのない怒り (unceasing fury) で抵抗する; Jonah は自己嫌悪 (self-aborrence) に追い込まれるが、Ahab は、巨大な自己主張 (gigantic self-assertion) で反撥する; Jonah は、自分の経験から神の命じる事を行う; これに対して Ahab は、大胆で和らぐことのない超自然的復讐 (audacious, immitigable supernatural revenge … (Moby-Dick p.162)) に乗り出すのである。この Jonah と Ahab の対比 (antithesis) は、Melville が子供の頃によく知っていた対照的な人間の型であった。Mapple の Jonah は、カルビニズムの神と神に選ばれた人間 (his elect), Captain Ahab は、その同じ神と見棄てられた人間 (reprobate), 罪を贖われていない人間 (a natural man left in his sin) とのそれぞれの関係を示す典型 (paradigm) である。』⁵⁾

『Thomas Robinson の Scripture Characters は、19世紀初期のカルビニスト正統派の家庭向けの解説書であるが、これによると、聖書 (Sacred records) は、罪を贖われた者 (those who were redeemed) について主に述べているが、同時に恐しく墮落した状態にある我々の本性についてもいくつもの例を示している。King Ahab は、人間の共通した尺度では測り切れない程に墮落している、他に例を見ない汚名を着せられている罪人として示されている。この King Ahab についての Thomas Robinson の解説は、Calvin 自身から発している伝統を反映していて、その伝統では、この旧約の King Ahab は、最悪の罪人に対する神の扱いの最も重要な例 (a prime example of the way God deal swith the worst of sinners) として使用されている。

Melville は、Ahab が鯨の攻撃を神の怒り (divine anger) と気付いているが、それに対して畏れの気持を抱くことを拒む時に、このカルビニズムの伝統を利用しているのである。』⁶⁾

<Reprobate in Calvinism>

『Thomas Robinson の解説によると、King Ahab は、神が与える罰にも拘らず、自

らの邪悪さを捨てようとしなない。「Ahab 自身、神の罰による難儀を感じるが、それによっていささかもひるまない。…神の懲らしめを受け一層頑固になる。人間の心は極めて固く、悔い改めをしないので、神の慈悲も裁きも、その心を和らげることも、抑えることもできない。Ahab を懲らしめ鍛えようとする神の救いの恩籠 (God's saving grace) は、Ahab の心には何の効果もない結果となる。」(Thomas Robinson, Scripture Characters) 「神に見棄てられた人間 (Reprobate) が、悔い改めができないのは、その頑な心を救うのに必要な神の恩籠が与えられないからである。神の手によって、エジプトに十の災厄が訪れる話は、神の裁きが、その様な頑な心の人間に繰り返し下され、その人間達が次第に怒りを大きくして行くというカルビニズムの見解の明証である」(Edward Reynolds, Works)』⁷⁾

T. W. Herbert は、こうしたカルビニズムの伝統から、神と、神に見棄てられた人間の典型 (paradigm) を使用して、Captain Ahab が創出され、その Captain Ahab の怒りが、遂には狂気に至るまでを次に述べる。

<Ahab's mounting pattern of resistance>

『Melville は、Captain Ahab の中に、神に見棄てられた人間が、神によって与えられる苦しみ (the divine inflictions) に対する抵抗を段々と強くしていく型をたどるのである。最初に Captain Ahab が現われる時、彼が既に罪の劫火 (penal fires) を浴びていたことが判る。がしかし、その劫火は彼の心を頑にただけであった。

“He looked like a man out away from the stake, when the fire has overwhelmingly wasted all the limbs without consuming them, or taking away one particle from compacted aged robustness.”

(“Ahab” pp.109-110)

(彼は、火あぶりの刑の抗から解き放された人間のように見えた。火は全身をなめ廻していたが焼き尽してはいなかった、年月を経たがっしりした体の一部を奪い去ってもいなかった。)

Melville は、明らかに Ahab の“限りない不屈の強情” (infinity of unsunderable wilfulness) を、顔にある磔刑の印 (crucifixion in his face) と結びつけている。そして Ahab は、乗組員の前に、何か大きな苦悩を持つ、名状し難い堂々たる圧倒するような威厳を示して立つのである。 (“...in all the nameless regal overbearing dignity of some mighty woe” (“Ahab” p.111)

カルビニストの著作者達が、はっきり認めていたことは、自然の災害 (natural disaster) は、それを命じた神に対する怒りを人間に抱かせるかも知れないということだ。というのは、神に対する敵意 (enmity against God) は、墮落した人間の本質的衝動 (an impulse of the depraved heart) と考えたからである。カルビニストの著作者達は、そのような神に対する怒りは、悔悛 (repentance) を促すために、人間自身に向けなければ

ならないと主張したのである。「神慮 (God's providence) に対して文句を言ってはならないし、物言わぬ被造物と争ってはならない。自分の怒りは自分の心に映さなければならない。」(Edward Reynold. Works)

Ahab が乗組員に白鯨に復讐する無謀な計画を明らかにした後で、Starbuck は、“物言わぬものに怒りを向けるのは、冒瀆に思える” (“to be enraged with a dumb thing seem blasphemous”) と反対する。これに対して、Ahab は逆上して応える。“冒瀆などということをお口にすな。俺は太陽にでも俺を侮辱すれば打ちかかって行くぞ!” (“Talk not to me of blasphemy, man, I'd strike the sun if it insulted me-” “The Quarter-deck” p.144)

Pequod号の索具に神の“Mene, Mene, Tekel Upharsin”の電光が燃えて乗組員を震え上らせて、Starbuck は、Ahab に追跡を止めさせようとする。(“神があなたに怒っておられるのです。神を恐れなさい” “god, god is against thee, old man, forbear” (The Candles p.148))。しかし、Ahab は、火があかあかと燃える鋸をつかみ、神の意志と思われるものよりも、彼自身の怒りと大胆さで乗組員を震え上らせて服従させる。Ahab の怒りは、Pequod 号の‘神におびやかされた船殻’ (god-bullied hull) が、海の深みに沈んで行く時に最高潮に達する。Ahab は鋸を投げつけて叫ぶ。

“from hell's heart I stab at thee; for hate's sake, I spit my last breath at thee ... Thus, I give up the spear” (“The Chase-Third Day” p.468)

(地獄の中からお前を刺しやる、憎しみをこめて最後の息を吹きかけてやるぞ、…こうなれば、鋸など捨てゝやる。)

この Ahab の怒りは、カルビニズム正統派の信仰の文脈の中では、壮大な意味 (cosmic meaning) を与えられることになる。』⁸⁾

『カルビニズム正統派の信仰の文脈は、又、Ahab が白鯨を追跡する際に直面する恐怖 (terror) と結び付いている。正統派の教えを説く人達は、全ての人間の不安や恐れ (fears) は、この地上の世界での全ての脅威 (every worldly menace) に暗に意味されている神の罰 (vengeance) を証言するものであると主張したのである。「全人類の良心は、この真理を協同して確証する。この真理によって、terror, horror, tremor などの恐ろしい意味や、不吉な兆しを意味する語が生れたのだ、…罪人は、自分達の邪悪さ (wickedness) を意識し、神が自分達を支配していることを確信しているから、自分達と関りのある神が至高の義であり、全ての罪に懲罰を与えることを明らかにするのである。』(John Owen)』⁹⁾

『Ahab が神の支配 (divine dominion) に反逆するには、自分の内部にあるこのような恐れを抑えることが必要である。Ahab が白子の獲物を見つけるために通過しなければならない Sanda 海峡へ接近すると、Ahab は多くの鯨に出会い、それらを追跡する。

直ぐに判ることだが、Ahab も海賊に追いかけているのである。この時、Ahab は

“(Ahab) bethought him that through that gate (the straits) lay the route to his vengeance and beheld, how that through the same gate he was now both chasing and being chased to his deadly end ; and not only that but a herd of remorseless wild pirates and inhuman atheistical devils were infernally cheering him on with their curses; when all these conceits had passed through his brain, Ahab’s brow was left gaunt and ribbed, like the black sand beach after some stormy tide has been gnawing it, without being able to drag the firm thing from its place.” (“The Grand Armada” p.321)

(Ahab が思ったことは、この門を過ぎたら、俺の復讐への道があるのだ。そして見よ、その同じ門を通して、自分が死に至る最後に向って追いつ追われつしていることだ、そしてそれだけではなくて、冷酷で野蛮な海賊の群れが呪いの言葉で地獄へ行けと俺をはやし立てゝいることだ… こんな想像が頭をよぎった時、Ahab の眉は、寂しく、荒れ狂う嵐の潮流に削られたが確かなものは奪われることもなかった黒々とした砂浜のようにうねっていた。)

カルビニズム正統派は、神の警告 (divine warnings) に対する意識的抵抗 (conscious resistance) を、神に見棄てられた人間 (reprobate) の抱く怒り (fury) の歴然たる知的一面、即ちそのような人間の狂気 (reprobate madness) であると考えたのである。「人間の邪悪さ (wickedness) が、怒り或いは狂気にまでなる時、その邪悪さによってこれら全ての兆し (神の怒りの兆し)、鞭すらも、そしてそれを命じた神をも非難するのだ。」神は、怒りの狂気 (the insanity rage) が、神に見棄てられた人間を混乱させ、その破壊力を阻止し、神を信ずる者に有益な教訓を与えるやり方で、破滅させるように定められている。神に見棄てられた人間 (reprobate) の破滅は、神によって十分に指図されかつ統制されているが、それでも尚、神に見棄てられた人間が、その破滅を自ら招いたことが明らかになるように取り決められているのである。「かくして、この怒りの力 (the power of this rage) に全く支配されている罪人は、神と神が罪人を完全に破滅させるために身につけている盾に、不意に突き当たると言われている。」(John Owen)¹⁰⁾ 神は、見棄てられた人間 (reprobate) の最深部の構造に働きかけて頭を狂わせ、心を頑にして、その人間を終焉に導くのである。

Calvin 自身が述べた様に、「神は、我々の敵の邪悪さを粉碎する様々な方法を知っている。というのは、時には神は、人間が、いかなる事であれそれが正気のことか、理にかなったことか理解できないように、人間の理解力を取り去られるからである。丁度、Ahab を欺すために、予言者の口を Satan を遣って偽りで満された時の様である。」(John Calvin)¹¹⁾

『Melville は、神がこの事柄について絶対的自由 (God's sovereign freedom) を宣言している韻文 (“こういうわけで、神は人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。” (Therefore, hath he mercy on him whom he will have mercy, and whom he will, hardeneth. (Roman 9 : 18) の箇所) に、印をつけているのである。』¹²⁾

<‘Inscrutable’ in Calvinism>

『神に見棄てられた人間 (reprobate) の狂気 (madness) の注目すべき兆候は、神の正義 (God's justice) がいかにこのように自由に人間にあわれみを与えたり、又頑にしたりすることによって、いかに壮大に展示されているかを認識できないことである。墮落した人間 (Fallen men) は、理性に対する錯覚した誇りによって、この神の取り決めを不正 (unjust) だと認識するのが典型である。

しかし、カルビニズム正統派は、神の法は、人間が果すことができない程無限に要求する。従って、神の真理は、神の助力を得ない理解力では、測り知れない神秘 (impenetrable mystery) を提示するのである。Calvinism の解釈者は、神の命令 (God's decree) に対する人間の不満は、神の存在の言葉に言い表わせない神秘 (the ineffable mysteries of the divine being) を前にして、死すべき人間の理性 (mortal reason) の弱さを示す基本的証拠であった。

Calvin は、アダムの墮落を神が命じたこと、そしてその結果である断罪された人間全ての行状や悲惨を、神を非難しないで、どうして肯定できるのかと尋ねられた。しかし Calvin は、その疑問の妥当性 (validity) を認める理由を与えなかった。神が罪の創造者 (author of sin) であるかもしれないという示唆そのものが、Calvin にとっては、自分に論争を挑む者達が神の本性についての疑問を論ずるに適さない証拠であった。Calvin はむしろ彼等に神を敬わない狂気 (impious madness) についての警告を与えた。「それ故に、神がアダムの墮落を命じたことを肯定するが、だからと言って、神がその墮落の創造者であるということが正当で真実であることを決して認めるのではない。私は厳粛な気持で信じるが、人間と背教の天使 (man and apostate angels) は、その罪によって神の意志に反すること、神が全てを命じられる意志 (His decreeing will) によって果されるかもしれない結果に反することを、その邪悪な意志によって行ったのである。もし万一誰であれ答えるとすれば、私と同じ事を認めるべきである。しかし、何故に、神の限りない、不可知の主権 (infinite and incomprehensible majesty) が、我々人間の限られた知力 (finite intellect) の狭い限界を超越することを不思議に思うのであろうか。しかしながら、私はこの崇高で人間の眼には見えない神秘 (sublime and hidden mystery) を説明しようとは思わない。たゞこの議論を始めた時に言明したことを記憶に止めておきたいと思う。即ち、神が啓示してきたより以上を知ろうとする者は、狂った人間である (those who seek to know more than God has revealed are madmen)。それ故

に、我々は神が許さないことまでを知ろうという法外で、正気を失った好奇心 (an immoderate and intoxicated curiosity) よりも、賢明な無知 (wise ignorance) を喜ぶべきである。」(John Calvin)¹³⁾

Calvin が、神の正義について責められた時に、神の不可知の主権 (an incomprehensible majesty) に拠り所を求められたことから、“測りしれない” (inscrutable) という用語が、カルビニズム正統派の、論争で使用される標語 (catchword) になったのである。Ahab が、白鯨に対する憎悪を説明する有名な節で、この ‘inscrutable’ という言葉は、意味深く二重に反響する。

“I see in him outrageous strength, with an inscrutable malice sinewing it. That inscrutable thing is chiefly what I hate.”

(“The Quarter-Deck” p.144)

(俺はあいつの中に暴虐な力が、測り知れない悪意で強靱になってひそんでいるのがわかる。その測り知れぬものが主として憎いのだ)

Ahab の突出した知力 (the thrust of intellect) が、“測り知れないもの” に従うことを拒否する人間の狂気 (madness) なのである。Father Mapple が Jonah の恐怖を天の神秘 (supernal mysteries) を知る鍵であることを示したように、Captain Ahab は、その神秘を究めようとする努力の中では自分の怒り (rage) に従うことを決心する。Ahab は、人間の持つ知力による全体的な攻撃的行為によって、死すべき人間の経験の可視の対象 (visible objects) の背後にあるものを発見しようとする。Ahab は、経験し得る対象の背後にある“条理を説く働きをする存在” (the reasoning thing) が、ボール紙 (pasteboard) 同然の薄い仮面 (mask) に守られている、それ故に Ahab は、鋸を投げつけることの様に、突進する知力の攻撃によって、その仮面を打ち貫いて、知力を持つ人間の死すべき運命の牢獄 (the prison of his intellectual mortality) から自らを解放することができるという自信を抱くのである。

Ahab にとっては、白鯨はその牢獄の壁であるから、彼の探求は、それ自体の限界を許し難いと思う精神の表象になるのである。(the figure of a spirituality that finds its own limitations intolerable)。白鯨を殺すことによって、自分という人間が、その手の中に、真理についての絶対的権力 (the sovereignty of truths) を握る人間であることを立証しようと意図するのである。Ahab は、Starbuck に向かって叫ぶ。

“Who’s over me? Truth has no confines.” (“The Quarter-deck” p.144)

(誰が俺を支配してしようか？ 真理に限界はない)

カルビニズムの理論では、神についての真理 (the truths of god) は、人間の地上の理性 (man’s earthly reason) を限りなく越えるものであるから、自立した思索は狂気に等しい一つの世界であると提示したのである (a universe in which independent thought is tantamount to madness)。

Melville は、地上の世界と天上の世界 (the earthly and the heavenly) との裂開 (the cleavage) に対するカルビニズムの判断を受け入れて、形而上的探求者は、重大な真理を求める正気の狂気 (the sane madness of vital truth) を宣言するためには、地上と天上の世界の隔たり (chasm) を越えることを提言しているのである。Melville は、神の正義 (God's justice) に、疑問を向けるという狂気 (madness) に対するカルビニズムの警告を取り上げて、Ahab の精神的壮大さ (spiritual heroism) に対する称賛の中へそれを組み込むのである。即ち、人間は、狂気の中へ突入する極点を越え、断固としてその洞察を進めて行く覚悟ならば、神が不正義であることを発見出来るということである。(a man can discover that God is unjust, if he is prepared to pursue his insights resolutely, beyond that meridian at which he plunges into madness.)¹⁴⁾

<God's injustice or divine malignity>

『カルビニズムが、神の正義 (God's justice) について、虚偽の宣伝をしていることを主張するために、改進黨の神学者 (liberal theologians) は、神の悪意 (divine malignity) についての仮説的表象 (a hypothetical image) を浮かび上らせたが、Melville は、これを白鯨についての構想を明確にするために使用している。

神の絶対的主権 (God's absolute sovereignty) という教義は、全ての悲惨や悪に対して神は責任があり、そして、神は大多数の人間を、苦しむだけの運命 (for no other destiny than to suffer) のために創造されたことを暗に意味している、ということが主張されたのであった。Calvin と同時代の或る人は、‘子供を悲惨な目に会わずために産みたいと望む動物ほど、(人間は言うまでもなく) 残酷な獣はいない’ (No beast is so cruel (to say nothing of man) that it would desire to create its young to misery) と言明した。

Melville は、Moby-Dick を構想している間に、John Taylor's Scripture Doctrine of Original Sin (1740)¹⁵⁾ を読んだ。(Edward Beecher によれば、この書物は、原罪に反対する優れた内容であり、ユニテリアン派の先駆者的存在である。) この中では、「カルビニズムの教義は、‘神の摂理を不正義で残酷で、圧制的であると表現するものである」と述べていた。(Calvinist teachings “represent the Divine Dispensations as unjust, cruel and tyrannical.)

19世紀のアメリカでは、カルビニズムに対する憤慨は最高潮に達し、或るメソジストの神学者は、もし、カルビニズムの教義が真実なら、最後の審判が下ると、‘天国と地獄はこぞって神の計画に反抗し、全ての理性ある人間は共謀して、全能の怪物 (the almighty monster) を呪う抗議集会を開くだろう’と言ったのである。¹⁶⁾

Ahab は、自分が地獄行きを宣告されていると考えていたので、その全能の怪物と闘っているのだと信じている。Ahab の憎悪を説明する章で、この憎悪の対象である鯨の噂は、

“(the rumors) did in the end incorporate themselves all manners of

morbid hints, and half-formed foetal suggestions of supernatural agencies." ("Moby-Dick" p.156)

(いつしかあらゆる病的な連想と一体になり、超自然的な力の代行者であるという、半ば形ができ上がった胎児のようなほのめかしになってしまった。)

Moby-Dick は、遍在性と不滅性 (ubiquity and immortality) を与えられるのである。

Moby-Dick は、

"infernal aforethought of ferocity, that every dismembering or death that he caused, was not wholly regarded as having been inflicted by an unintelligent agent." ("Moby-Dick" p.159)

(悪魔のような残忍な予察能力を示すので、人間の手足をばらばらにしたり、死をもたらしても、知力を持たない代行者によって行われたようには見做されなかった。)

これらの描写は、悪意の神の霊 (the specter of a malignant god) を呼びおこす言葉を使って、Ahab が白鯨の像を表現するのに備えるものである。この霊は、悪魔的な残忍な予察能力に従って、大多数の人間を Satan の手に渡すために人類を創造し、その手段として Ahab の墮落を命じたのである。白鯨は、Ahab にとっては、'あの触知しがたい悪意' (That intangible malignity) の化身となったのである。

"That intangible malignity which has been from the beginning ; to whose dominion even the modern Christians ascribe one half of the worlds ... All the subtle demonisms of life and thought ; all evil, to crazy Ahab, were visibly personified, and made practically assailable in Moby-Dick." ("Moby-Dick" p.160)

(この不触知の悪は、開闢以来存在してきた。現代のキリスト者でさえ、世界の半分はこの悪の領域だとしている、…狂ったアハブにとって、全ての人生と思考にまつわる名状し難い悪魔主義は；全ての悪は、モービー・ディックにはっきり目に映るように人格化し、実際に攻撃し得るものになったのである。)

Calvin の教える神の怒りは (the wrath of Calvin's God), 神の恩寵という絶対的な恵み (the sovereign favor of his grace) を享受しない人間によって経験される。Calvin と対立する人達に言わせれば、この様な状況の進行が、何とも名状し難い悪魔主義 ("subtle demonisms") を必然的に伴うのである。Calvin の神は、神に見棄てられし人間 (reprobate) が神を憎むように定めることによって断罪する、そして、それによって神自身の測り知れない、神自身の reprobate に対する憎悪を示すのである。この複雑な意味は、Melville の多義的要約文 (ambiguous summary sentence) の中に見出される。

"He (Ahab) piled upon the whale's white hump the sum of all the general rage and hate felt by his whole race from Adam down."

（“Moby-Dick” p.160）

（Ahab は、アダム以来、全人類によって感じられている全体的な怒りと憎しみの総和を、鯨の白い瘤の上に積み上げたのである。）

この怒りと憎しみは、神自身によって人類に加えられたものである。この神と人間の悪意のぶつかり合う話（the story of this impacted reciprocal malevolence）は、正にアダムから始るのである。

<Ahab's hatred and the insight of it>

『Ahab の白鯨に対する狂った憎悪とその憎悪の意味についての洞察は、抹香鯨（sperm-whale）漁業に全般的に広まっている“荒唐無稽な噂”（“wild rumors”）に非常によく似ていて、Ahab が白鯨を追いかけるのに乗組員も参加する同意を可能にする一つの事実である。全人類は、神の怒り（divine rage）に従うことを認めることで、現代のクリスチャン（“modern Christians”）の域を越えてしまったので、Melville は、Ahab の神に対する憎しみという反応を、その彼方（the Beyond）へ向う人類の全体的な傾向（general disposition）という文脈の中へ置くのである。

“The Quarter-deck”の中で、Ahab が和らぐことのない憎悪を口にし始めるにつれて、乗組員と間に生じてくる磁力的引き合い（magnetic attraction）を描写する。Ahab は、乗組員の内部に深く埋れていたもので、彼等自身が殆ど気付かなかった或る一脈の感情に触れるのである。Ahabの特有の活力が乗組員を刺激するにつれて、乗組員は、自分達がこんなにも興奮しているのは、一体どうしてなのかと不思議に思うかのように、お互いを奇妙な目つきで見つめ始めた。

“the men began to gaze curiously at each other, as if marvelling how it was that they themselves became so excited.”

（“The Quarter-deck” pp.141-142）

白鯨の追跡が続くうちに集められる白鯨についての報告の中でのCalvin の怪物めく神（monster-God）の特色を、Melvilleが喚起するにつれて、Ahab と乗組員とが共有する白鯨に対する観念は、確認され拡大される。

“The Town-Ho's Story”の中で、ある人殺しを企てる男が、その相手が Moby-Dick に殺されることで、その殺すという行為を免れる。Moby-Dick によって殺される運命の男は、“予定の運命であった”（‘predestined’）と、数回にわたって読者の目を引きながら、Melville は、いたずらっぽく言うのである。

“This story seemed obscurely to involve with the whale a certain wonderous inverted visitation of one of those so called judgment of God which at times are said to overtake some men.”

（“The Town-Ho's Story” p.208）

“この話は、鯨と、時には或る人達を襲うというあのいわゆる神の裁きの驚

くべき倒錯した訪れとを、ぼんやりと結び付けているように思えた。)

気の狂った Shaker 教徒である Gabriel は、“白鯨は Shaker's God の化身に他ならない”と断言する (... The white whale to be no less than the Shaker God incarnated)。

Melville は、Shaker 教徒が、原罪についての狂的先入主の故に、性的関係を否認していることを知っていた。

Pequod 号が出会う何隻かの船から、Moby-Dick について知ったことを要約する時に、Melville は、神の選びは、選ばれる人達の徳目と関係がない (election has nothing to do with the virtues of the elect) という Calvinism の見解を明確に思い起させる用語を使用している。

“all his successive meetings with various ships contrastingly concurred to show the demoniac indifference with which the white whale tore his hunters, whether sinning or sinned against” (“The Hat” p.437)

(その後の様々な船と出会ったが、全ての船は、白鯨が自分を追跡するものを、罪を犯していようと罪を犯されていようと、悪魔的な無関心で引き裂いていることを対照的に示すことに協力した。)

Melville のこれらのカルビニズムの主題 (Calvinistic motifs) の使用は、Ahab の狂気の目的 (mad purpose) に論理的に統合された力を与える。そしてその目的を、神と、見棄ての定め (the decree of reprobation) の下で生きる人間の関係についてのカルビニズムの説明に適合させるのである。

しかし、Melville は人間の尊厳が要求するもの (what is required by human dignity) についての改進黨 (liberals) の考えに頑に傾倒し、それに従ってカルビニズムの神と見棄ての定めについての説明を構成する様々な要素を示すのである。人間の生得の権利 (inherent rights of man) は、Ishmael の希望に満ちた宗教観の規準 (criterion) として表わされているが、Calvinism の体系の逆手を取るために働いているのである。

Melville は、気高い精神の持ち主が (noble spirit)、その尊厳を保持し、神の苦難 (divine inflictions) に抵抗しようとする努力を一つのドラマにすることによって、ある絶対的な壮大な悪の像 (the image of a positive cosmic evil) を喚起するのである。

この構造とテーマの発展は、Ahab の精神が次第に狂的になる (Ahab's moral deterioration) ことで複雑になるが、依然として Melville の関心の中心であって、Moby-Dick の最後の攻撃の描写の中で頂点に達するのである。この場面で Melville は、Calvinism の神は、死すべき人間がそれに抵抗しようとしても無益である予定運命によって、永遠の悪意を示すのであるという非難を構成する明確な要素を組み合わせている。

“Moby-Dick from side to side strangely vibrating his predestinating head, sent a broad band of overspreading semicircular foam before

him as he rushed. Retribution, swift vengeance, eternal malice were in his whole aspect, and spite of all that mortal man could do, the solid white buttress of his forehead smote the ship's starboard bow, till men and timbers reeled." ("The Chase—Third Day" p.468)

(モーヴィ・ディックは、予定運命を告げる頭を左右に奇妙に震わせながら突進して行く時に、自分の前方に半円形の広い帯状に広がる泡を立てた。懲罰、速やかな報復、永遠の悪意が、その白鯨の全面にあって、死すべき人間ができる全てを無視して、堅牢で白い城塞のような額が、船の右舷船首に激突し、人間も材木も崩れ去ったのである。)¹⁷⁾

不信者の壮大な憤り (Infidel's Cosmic Resentment)

T. W. Herbert は、Melville が Ahab と Ishmael を登場させるのは、地上における道徳の価値基準としての神についての真理が崩解している精神的状況を読者に喚起させるためであると述べ、Ahab は、世界観を狂気によって一貫させる一方、Ishmael は真理全体を包含する体系が発見できないでいるという二つの精神的状況は、全てが theocentric な解釈に基く世界の危機の中で、人間が取り得る選択に他ならないことを示していると主張する。この章での、"Whiteness of the whale" は、事実の世界の不毛の非人格性に裏切られる Ishmael が、Ahab の戦いに同調する精神的状況を表現するものとして明細に分析されている。

<Ahab and Ishmael>

『... Ahab と Ishmael は、劇的葛藤 (dramatic struggles) を経験する。その葛藤は、二人の人物が代表する本質的態度の比較的幅広い、微妙な範囲を示すものである。

Ishmael の最も意味深い発見は Ahab との関係から生じるが、この関係は人間的な関係ではなく、思考の関係である。Ahab は Ishmael を刺激して、根本的に新しい探求に向かわせる。その探求は、Ishmael を熱中させるほどの悪に対する先入主 (absorbing preoccupation with evil) に基いていて、Ishmael が精神の航海に乗り出した時の豊かな精神に比較すると一種の驚きである。しかしながら、我々の初期の Ishmael との出会いによって、Ishmael が Ahab と、Ahab の猛烈な白鯨の探求に心底から従うことには、十分な根拠があることは判っているのである。即ち、Ishmael の Ahab や Ahab の追跡に対する忠誠心の本質は、神についての真理に対する全体的展望 (a comprehensive vision of divine Truth) を得たいという願望が満たされないという認識によって生じた深い憤りなのである。

Ishmael は、白鯨に対する見方を Ahab と共有してはいない。Ishmael は、Ahab の磁力的な興奮 (magnetic excitement) によって見方が発達し、'最も破壊的な精神の死をもたらす悪以外の何物でもないものをあの畜生' ("naught in that brute but the deadliest ill" — Moby-Dick p.163) に見出すのである。白鯨の白さが目覚めさせる不気

味な恐怖心 (the eerie dread) は、複雑な精神的意味を生み出し、暫くの間 Ishmael を強力に服従させるが、やがてその力を失う。Ishmael が、Ahab の探求に加わるのは一時期であるが、それは、Ishmael の究極的懐疑主義 (final skepticism) へ向う旅の一段階である。しかしこれは、極めて重要な段階である。何故なら、最終的な宗教上の真理 (the final religious Truth) が存在しない世界が、そのような真理を発見できるものと期待する人間の意識に、どんな風に見えるかを劇的に表現しているからである。

Ishmael は、初めの頃の野心が示している様に、人間の生涯は、神を宇宙の中心に置く宗教の定則 (a theocentric formulation) に従うべきであることを要求するのであるが、その要求が満たされない時に何が起るかを示しているのが、“白鯨の白さ” (the Whiteness of the Whale) の章である。』¹⁸⁾

<Whiteness of the Whale>

『Ishmael は、白鯨の白さによって喚起される‘漠たる言い知れぬ恐怖’ (vague, nameless horror) は、神秘的で殆ど口に出しては言えないものであるから、それを何か理解できる形式で表現することに殆ど絶望する (“the Whiteness of the Whale p.163), と申し立てる。

理解できる形式で表現できないというこの弁明は、Melville がこの章での修辭的表現法 (rhetorical strategy) を調和させるのに用いる三つの弁明の最初の一つである。

Ishmael の怒りを含む狼狽 (angry consternation) の意味を抽象的に述べる代りに、Melville は、その怒りが根ざしている経験を伝えようとする。Melville は、この章をそれに対応して、想像力に富む様々な印象 (imaginative impressions) を追いかける読者の能力をうんざりさせる様な仕方で編成する。

Ishmaelが、精神の冒険に満ちた驚異の世界 (Wonder World) へ入って行くのを表現する時に、水と瞑想 (water and meditation) の結び付きの様々な事例を積み重ねたが、今、‘白さ’ (whiteness) の連想をここでは、五つの中味の詰った群れ (five massive clusters) にまとめている。

五つの群れの最初の二つは、“白さ”と、それぞれ“神聖さ” (sacredness) と、“恐怖” (panic) を示唆するもの、との結び付きを確立する。三番目の群れは、白さを持つ物 (things of whiteness) は、恐しさを与えるように計算された直接的連想の全てを剥ぎ取られた時でさえ、恐るべき魔力を発揮することを示そうとしている。白さ (whiteness) は、かくして白い物が持つ意味と独立していて、それ自身が何か霊的な意味 (spectral meaning) を持つものとして区別されるのである。

読者に白さだけ (whiteness alone) が持つ不瞭瞭なほめかしを感知するように要求する時、Melville は、第二番目の弁明を述べるのである。

“in a matter like this, subtlety appeals to subtlety, and without imagination, no man can follow another into these halls. And though,

doubtless, some at least of the imaginative impressions about to be presented may have been shared by most me, yet few perhaps were entirely conscious of them at the time.” (“The Whiteness of Whale” p.167)

(こんな事柄においては、捉えがたいものは、捉えがたい表現をする。そして想像力無しでは、誰もこれらのホールには入れない。そして、勿論、これから表現されようとしている想像力に富む印象の少ともいくつかは、大抵の人が耳にしたかも知れない、がしかしその時それらを完全に意識したものは多分殆どいないだろう。)

Melville の四番目の群れは、それ自体が恐るべきもので、白いものに戻る。一般的に明白に理解されるものと、平素の意識下のレベルで想像力が宿す意味との対照を際立てるためである。

Melville は次のことを断言する。即ち、想像力の無い人間は、本能的に白さに怯えるが、何故なのかは判らない。従って想像力は、“この地上の世界に在る悪魔主義についての知識を得ようとする本能 (the instinct of knowledge of demonism in this world)” が、意識となって、真の知識になる手段となることである。

Melville は、想像力による探求が明らかにするであろう不吉な秘密をほのめかすにつれて、段々とその探求の重要さを高めて行く。しかし Melville は、様々な事例を一斉に与えることが、諸者の共感に重い緊張を与えることに全く気付いている。

Melville の三番目の弁明は、段々と高まるいら立ちを先取りするものである。

“But thou sayest methinks this white-lead chapter about whiteness is but a white flag hung out from a craven soul; Thou surrenderest to a hypo, Ishmael.” (“The Whiteness of the Whale” pp.168-169)

(しかしお前は、この白さの周りの白鉛は、降参した魂のかかげる白旗だと思おう言うだろう。お前も憂うつ病に降参したのか、イシュマエルよ。)

この最後の弁明が、読者のひどい苛立ちの機先を制する努力をするように、Melville の最後の五番目の群れの例は、この苛立ちを利用する。白さの呪文 (the incantation of this whiteness) は長く続いたが、想像力による探求を困惑させる世界があることを発見することに、その中心的意味があることを明らかにする。この章の修辭的表現の構造 (rhetorical structure) は、この世界の発見は、一種の裏切り (betrayal) であることを伝えようとする Melville の願望に役立っている。

Is it that by its indefiniteness it shadows forth the heartless voids and immensities of the universe, and thus stabs us from behind with the thought of annihilation...? Or is it, that as in essence, whiteness is not so much a color as the visible absence of color, and at

the same time the concrete of all colors; is it for these reasons that there is such a dumb blankness, full of meaning, in a wide landscape of snows — a colorless, all-color of atheism from which we shrink? And when we consider that other theory of the natural philosophers, the all other earthly hues — very stately or lovely emblazoning ... all these are but subtle deceits, not actually inherent in substances, but only laid on from without; so that all deified Nature absolutely paints like the harlot, whose allurements cover nothing but the charnel-house within; and when we ... consider that ... the great principle of light, for ever remains white or colorless in itself, and if operating without medium upon matter, would touch all objects, even tulips and roses, with its own blank tinge — pondering all this, the palsied universe lies before us a leper. (“The Whiteness of the Whale” pp.169-170)

(その不明確さで、銀河の白い深みは宇宙の中心のない空間と涯し無さの前兆であり、寂滅の思いで我々の背中を突き刺すのではないか？ 或いは本質的に白さは色というよりは、色の無さが眼に映ることであり、同時に全ての色の具象なのだろうか。こうした理由の故に、雪に覆れた広々とした景色に意味に満ちたおし黙る空白があるのだろうか。我々がたじろぐ色の無い全ての色の無神論——そして我々が、あの自然哲学者の理論、全ての地上の色どりを考えてみる時、… 全て堂々と或いは美しく彩色している… これら全ての色は、巧妙な欺瞞に過ぎない、決して実際に物の本質に内在するものではなく、全て外側から塗り付けられたものだ。それ故に、全ての神格化された自然は、売春婦のように化粧する。その魅惑も内側の納骨堂を隠すだけのものだ。そして、光の偉大な原理を考える時、その光はそれ自体永遠に白い、即ち無色で、媒体なしに物に当てられると、チューリップであれ、バラであれその無色の色合いでそれに触れるのだ… これら全てを考えると、中風に罹った宇宙が、癩病者のように我々の眼前に横たわっている。)

売春婦 (harlot), 納骨堂 (charnel-house), そして癩病者 (leper) などのイメージが暗に意味する嫌悪 (disgust) は、一種の特有な精神的裏切り (a peculiar spiritual treachery) に対する Ishmael の反応を示している。

この反応は、初め頃に、Melville が言及していた、人間の心と自然の関係についてのナルシズムと全く違うものを示唆している。このぞっとする様な白さ (this appalling whiteness) には、人間の心はその反映を見出せない。心の営みや探索に対して無関心な世界をそこに見て、投げ返されるのである。“驚異の世界” (wonder-world) へのおびき

寄せる魅力は、胸が悪くなるような欺瞞 (revolting deceit) であることが暴露されるのである。そして、真理を探求する者は、‘自分を取り巻く全ての景色を包みこむ途方もなく大きい白い屍衣を、何も見えないままに凝視する哀れな不信心者’ (“wretched infidel who gazes himself blind at the monumental white shroud that wraps all the prospect around him” — “The Whiteness of the Whale” p.170) となるのである。探求者は、その精神を最大の力をふるって行使するが、その力を破壊する経験の中へ入って行くのである。この探求に対する裏切りに覚える怒りが Ishmael と Ahab を結び付けて復讐の戦いへと駆り立て、“人間の知的、精神的苛立ち” (man’s intellectual and spiritual exasperations) の憎むべき象徴を破壊しようとするのである。

Ishmael の‘白さ’についての解釈は、全体を支配する目的を再び主張して結びとなる。

“Wonder ye then at the fiery hunt?” (—p.170)

(だから、この激しい追跡をいぶかるのか?)』¹⁹⁾

『精神的意味を伝えるために、事実を例証的に使用するという点において、“The Whiteness of the Whale”の章は、Melville の手順 (procedures) と20世紀半ば頃から流行していた審美論 (aesthetic theories)¹⁹⁾ の類似を認めてきた批評家によって、“象徴化の想像力” (symbolic imagination) の勝利と受取られてきた。

Melville が実際に使用している手法や文体などのピューリタンの背景は研究されてきたが、Ishmael が瞑想を発展させる方法が、行動を導くものとしての想像力に対するカルビニズム正統派の不信を反映している、ということに対しては、十分な理解がされてこなかったのである。

Ishmael は初めの頃の解説で、‘巨大な鯨そのものについての圧倒されるような思いが、はずみと動機の主なもので、これらは様々に偽装されて巧妙に私に示されて、私に私の果す役目をさせるのだ、その上私を丸め込んで、この選択は、偏見のない自由意志と明確な判断力から生じているという錯覚を私にさせているのだ、’と報告した。(“the overwhelming idea of the great whale himself was chief among the springs and motives which being cunningly presented to me under various disguises, induced me to set about performing the part I did, besides cajoling me into the delusion that it was a choice resulting from my own unbiased free will and discriminating judgment.” — “Loomings” p.16)

Ishmael の象徴を解釈する能力 (capacity for symbolic interpretation) は、はるか以前に描かれた神慮による壮大な計画 (The grand programme of Providence) に従うための手段 (means) になるのである。‘これらの理由で、鯨取りの航海は、歓迎すべきものだ。‘驚異の世界’の水門は勢よく開かれた。’ (“By reason of these things, then, the whaling voyage was welcome; the great flood-gates of the wonder-world was swung open”) Ishmael は、自分が驚異の世界へ入って行くのは、真実の発見としてで

はなくて、“私を目的に向わせる激しい気まぐれ” (“wild conceits swayed me to my purpose” — “Loomings”, p.16) が働いたからであると見ている。

Melville の時代に、カルビニズムの教義と対立する人達は、神慮 (Providence) に関する正統派の概念は、それが、自己欺瞞は人間の心の特色であることを暗に意味しているが故に真実でない、と非難したのである。

人間は、自分の意志を自由だと経験するので、自分の決定が創造 (Creation) 以前に事実上決定されたという考えは、慈愛深い神 (a benevolent deity) が、‘自ら創造したものの理解力をもて遊ぶ (sport with the understanding of his creatures)²⁰⁾ ことは決してない’ということと両立しないのである。従って、Ishmael の憤り (resentment) は、想像力は、自分の為に既に立てられていた神の壮大な計画の中で、その役割を思わず果させるように人間に対して定められている或る特有な錯覚 (an idiosyncratic delusion) 以上のものを産み出すべきであることを、それとなく要求することから生じるのである。

Ishmael の懐疑的探求は、行動を導くことのできる真実が発見されるまでは、満足しないのである。そしてそのような探求を明らかに裏切ると思われるものは、売春 (harlot) の世界に対する Ishmael の嫌悪を増すのである。

想像力は、道徳的価値 (moral validity) を生む総合的な精神的観念 (a comprehensive spiritual vision) を作り上げるべきであるという要求は、象徴主義 (symbolism) に対する Melville の考えと、後で現われるその理論との著しい対照を示している。

Melville は、根本的に私的な意味 (radically private meanings) に疑問を持っていた、そして、人間の心とその対象との一貫性に与えられる、より十分なる真理を求めたのである。Melville は、意味と事実が一つになる滅びの時 (the perishing moment in which meanings and fact are one) を皮肉に賛えることで満足しなかったのである。かくして Ishmael は、積極的な theocentric vision を得ることができない失敗から立ち上って、その反対のことに熱心に取組むのである。Ishmael は、Ahab の壮大な反抗の英雄的な規模に奮い立たされ、Ahab の反抗を活気づけている神の悪意 (divine malignity) に鋭く集中している観念に奮い立たされるのである。Ahab に拍車をかけられ、Ishmael は、自分自身の欲求不満と思われるものから、行動に対する観念的根拠 (visionary ground) を規定することは可能だと知るのである。

Ishmael は、自分の宗教的渴望 (religious yearnings) に無関心な世界の発見を、宗教的怒り (religious anger) を向ける合図と受取り、一時の間「Ahab の抑えられない戦いは、Ishmael のものであるように思えた」と主張するのである。 (“Ahab’s quenchless feud seems mine.” — “Moby-Dick” p.155)²⁰⁾

<Symbolizing imagination; fact and symbol>

『Ishmael の鯨及び捕鯨についての一層詳しい解説は、しばしば冒瀆的な効果 (blasphemous effect) を帯び、それは Ahab の復讐心に燃える探求 (vengeful quest) にふ

さわしいものである。我々は、Ahab が白鯨の中に“全能の怪物” (almighty monster) を見出しているのを見てきた。その怪物の本質的特長は、カルビニズムの神に対する改進黨 (liberals) の攻撃に暗に意味されているが、Ishmael の解説の微妙な表現 (subtleties) は、事実と象徴 (fact and symbol) に関するカルビニズム正統派の概念によって説明できるのである。

カルビニズム正統派の伝統は、日常生活の行為や事物の敬虔な改善 (pious improvements) を奨励することによって、象徴化する想像力 (symbolizing imagination) を刺激したが、同時にカルビニズムの教義によって、精神の働きを規制しようと努めたのである。正統派が想像力が持つ力を重視していたことは、想像力の倦むことのない働きを封じ込め、その気まぐれな豊かさを切り詰めようとする努力だけでなく、神聖な真理の道に沿って訓練しようとする努力にも明白に示されていた。

カルビニズムの伝統の初期の説明者は、聖書の中に述べられる全てのことに、正確な教義上の意味を与えようと努力してきた。それ故に自然の世界は、神の啓示の‘第二の書’ (‘the second book’ of God’s revelation) と考えられ、聖書そのものと同じ程完全に、そして聖書の教義に従って注解できるとしたのである。

Ahab の狂った観念 (mad vision) は、正統派が鯨に与えた教義上の意味をひねくれて受取ったのである。同様に、Ishmael の鯨学の分類 (cetological taxonomy) は、Melvilleがそれを伝統的教義と関連させる時に、冒瀆的意味を持つことになる。

“To grope down into the bottom of the sea after them; to have one’s hands among the unspeakable foundations, ribs, and very pelvis of the world; this is a fearful thing. What am I that I should essay to hook the nose of this leviathan! The awful tauntings in Job might well appal me. ‘Will he’ (the leviathan) ‘make a covenant with thee? Behold the hope of him is vain!’” (“Cetology.” p.118)

(鯨を追って、海の底へ手探りで下りて行くこと、手を言語に絶する世界の土台、肋骨や骨盤に入れようとするのは、恐いことだ。

このレビアタンの鼻に鉤をひっかけようとするとは、一体俺は何者なのだ。ヨブの恐い教えに愕然としても当然なのだ。‘レビアタンは、汝と契約を為すや？ 見よ彼の望みは空し’)

正統派にとって、ヨブ記のレビアタン (leviathan) は、神の力だけではなく、超絶的神秘 (transcendent mystery) の心象 (image)、つまり人間の知識に対する誇りを卑小にするために出された心象なのである。ヨブに対する神の最初の問いは、「知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くする者はだれか。…わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこに居たのか」 (“Who is this that darkeneth counsel by words without knowledge? ... Where was thou when I laid the foundations of the earth?” (Job 38; 2-4) し

かしながら、今や Ishmael は、分類を組織化する原案を作るために、言語を絶する世界の土台 (the foundations...of the world) へ探りの手を入れようとする意図を宣言する。 (“Cetology” p.118)

Ishmael の鯨の区分 (folios, quartos, duodecimos) は、人間の自然を分析する力、神の啓示の第二の書を分析しようとする力は、神の神秘は測り知れない (God’s mysteries cannot be penetrated) という、第一の書 Bible によって進められてきた主張に挑戦するものである。

Moby-Dick を書いている時に、Melville は、手許に置いた Bible の中の、ヨブ記 (41: 6) からの彼の懐疑的パロディの一つに焦点を合わせた一節 “the awful tauntings in Job” に印をつけていた: “Shall thy companions make a banquet of him? Shall they part him among the merchants?” (汝の仲間、彼を食卓にのせるのか? 彼等は、彼を商人の間で分けるのか?)。Ishmael の仲間 (companions) の一人である Stubb は、Pequod 号が最初に殺す鯨で夕食を取る。鯨 (sharks) が鯨を喰べようと群り集ってくると、Melville は、その場面を人間の強欲さ (sharkiness) についての意見として示す。そして、聖書の内容を明らかに反響する言葉で、Stubb と鯨が似ていることを指摘するのである。 (“Nor was Stubb the only banqueter on whale’s flesh that night” “Stubb’s Supper” p.247) (その夜、鯨の肉で晚餐を取ったのは、Stubb だけではなかった。)

Stubb が鯨を食べている時、その力 (might) は God’s image であるが、Stubb は料理係に無理矢理鯨に皮肉のこもった説教をさせる。この容赦ない言葉の羅列 (this brutal charade) は、神の脅し (divine threatening) に対する耳ざわりな嘲けり (raucous mockery) を伴っていて、たゞ空想的なだけのものではない。Melville は、この鯨を食べることは、捕鯨船の乗組員が実際に行ったことに基いているという事実を強調している。レビアタン (鯨) が実際に商人の間で分けられていた19世紀の捕鯨業に代表される技術の熟達は、Melville に、正統派の教義を parody 化し、そして捕鯨業 (the operations of trade) を本質的に不敬 (impious) であると述べる機会を与えたのである。

Melville は、ヨブ記の中に、神の言葉によって定義された “鯨” に対するカルビニズム正統派の理解を引合いに出すが、それは神の力は、捕鯨業では、ごく普通に嘲笑されていることを示唆するためである。“言語を絶するほどに憐れな” 年老いた鯨が、恐しく深く潜るのを述べる時に、Melville は、この結びつきを更に強調する。

“Is this the creature of whom it was so triumphantly said — ‘Canst thou fill his skin with barbed irons? or his head with fish-spears? The sword of him that layeth at him cannot hold, the spear, the dart, nor the habergeon: he esteemeth iron as straw; the arrow cannot make him flee; darts are counted as stubble; he laugheth at the

shaking of spear!’ This the creature? this he?

Oh! that unfulfilments should follow the prophets. For with the strength of a thousand thighs in his tail, Leviathan had run his head under the mountains of the sea, to hide him from the Pequod’s fish-spears! (“The Pequod Meets the Virgin” p.300)

(これがその創造物か；こいつについてはかつて勝ち誇るが如くこう言われたことがある。‘あなたもりでその皮を、やすでその頭を十分に突くことができようか。剣で襲っても、鋸も、投げ槍もききめがない。それは鉄をわらのようにみなし、矢もそれを逃げさせることができず、投げ矢も切り株しか見やしない。投げ槍の震える音を笑うのだ’これがあの創造物なのか、これが奴か？ 預言者の言うことがこんなにも不成就だったとは！千もの腿の力を尻尾に持ちながら、ピークオドの鋸から隠れようと、海の山なす波に頭を潜らせ走っていったからだ。)

Melville が、実際に経験したことは、教えられてきたこと、大きく矛盾していた。それ故に本質的に哲学的宗教的意味を帯びたのであった。正統派の信じていることを疑うには、捕鯨船で見たこと、行われたことなどを語りさえすれば良かったのである。Melville は、自分の話がぞっとする我慢ならない寓意物語 (hideous and intolerable allegory) であることを否定し、捕鯨の簡単な事実のみを提供しようとしていることを主張する (“The Affidavit” p.177)。しかし、この簡単な事実は、正統派の宗教者の間に大きな混乱を生み出す種類のものであった。

Melville は、事実と寓意 (fact and allegory) の区別が問題になった状況を活用したのである。正統派の聖書学者は、聖書上の事実を教義的意味を持つものと考え、その神聖な道徳的意味 (sacred moral bearing) を傷つけると思われる新しい事実に抵抗した。正統派は、Job や Jonah の聖書の話が、寓意 (allegory) であると弁護しないで、それらの話をその様なものとしてそれとなく利用した。それ故にいかなる鯨も人間を呑み込むことはできないという発見は、一つの道徳的衝撃 (a moral impact) を与えたのである。(Herbert によれば、Melville は、“Jonah Historically Regarded” の章で、この発見の哲学的意味を利用して、老水夫にヨナの話が事実でないと言わせ、その主張は、その男の理性の愚かしい誇りを証明するだけだと皮肉たっぷりに結んでいる。) この発見は、象徴についての枠組全体を動揺させたが故に、象徴的意味を帯びたのである。Melville の示す様々な象徴 (symbols) は、この様な状況から、特有な多義的意味合い (equivocal bearings) を得るのである。即ち Melville は、正統派の実践する象徴化 (orthodox practice of symbolization) が産み出した存在であり、又同時に、その象徴化の分裂 (it’s disruption) の極めて鋭敏な登録者でもある (a highly sensitive register)。

Melville は、事実と象徴 (fact and symbol) は、これまでにない不安な関係 (a new

uneasy relation) へ移っていることを感知したのである。正統派の理論では、象徴が表わす‘事実’或いは‘真理’ (fact or truth) は、物質的な事物を通して目に見える神聖な洞察から生じるものであった。(the item of sacred insight visible through the physical object)。しかし、様々なケースが増加してくる時、明白になったことは、問題の物質的な事物 (the physical object in question) は、それが象徴するとされている‘真理’ (“truth”) に従う性質を持っていないということであった。鯨は無敵ではない (whales are not invincible) ということが発見されたのだ。従って、事物の物質的性質についての事実、神の真理の事実 (“fact” of divine truth) と対立し、その象徴としての力 (its potency as “symbol”) が衰え始めたが、それは、物質的性質の事実が、事物のもつ様々な異なる意味 (disparate meanings) が合体して、一つの意味のある世界を作り上げている体系から離脱したからである。そのような知的、道徳的対立 (such intellectual and moral conflict) の故に、19世紀における科学知識の進歩は、現代では最早有り得ない文化的衝撃 (a cultural impact) をもたらしたのである。』²¹⁾

<Natural theology>

『Ishmael の非常に面白い懐疑的皮肉 (skeptical sallies) は、自然神学 (natural theology) に向けられている。この神学は、新しい科学的事実を、西欧の広く受け入れられている宗教的伝統へ適応させようとする自由な考え方による努力であった。この野心的な計画は、“キリストの神” (Christian God) の本質的属性 (the essential attributes) を、自然の世界における神の啓示から推理しようとしたのである。Melville の時代に最もよく知られたこの自然神学の解説者は、William Paley で、Melville は若い頃に読んだことがあって、Moby-Dick の本文に先立つ抜粋の中に引用 (“Extracts” p.7) されている。Paley の著作の多くは、自然の過程と、人間の作った機械との間の、当然と思われる類似に基いている、一つの主張に合致する詳細な事例を示している。例えば、Paleyが挙げている例は時計である。Paley はもし時計が見つかり、吟味されると、その明らかなデザインは、時計を作る人間の存在を直ぐに確立することを確信した。Paley にとって、自然における‘考案’ (“contrivance”) の全ての例は、その考察をしたもの (contriver) の存在を証明するのであり、その‘発明者’ (“artificer”) の性格は、その仕事 (works) に明白に表われるのである。その様な考案者、或いは発明者 (artificer) が存在するという証明は、非常に多様で複雑な考案物 (contrivances of great variety and complex) が発見されると、非常に強化されるのである。かくして Paley は、科学が自然における巧妙なメカニズムを認識するにつれて、知力を持つ存在 (an intellectual being) が、世界の創造主であるという宗教的主張に、より一層大きい確認が与えられることを信じたのである。(William Paley, Natural Theology; or Evidences of the Existence and Attributes of the Deity, Collected from the Appearances of Nature (Hallowell, 1826) p.p.5-13) 然しながら、神の知力 (the intelligence of the deity) を

証明することは、Paley の野心を満足するものでなかった、そして彼は、‘愛’ (“benevolence”) を自然のメカニズムから演繹しようと懸命に努力したのである。しかし Paley は、考案 (contrivance) が認められ、その考案の意図 (design) が人間にとって有益 (beneficial) である事例が多い (plurality) ということを主張するだけしかできなかったのである。自分の立場を強化するために、Paley は、その目的として悪なる結果 (an evil effect as its end) を持つ考案は、ただの一つもない (no train of contrivance) と主張したのであった。

Melville はこの主張を笑って、Paley 型の主張をパロディに仕立てて、抹香鯨の頭の‘破城槌’ (the battering ram) を丹念に説明する。Melville は、その頭部の大きさ (mass)、弾力性 (resilience)、浮揚性のある軽さ (buoyant lightness) を、一つの結果に全てが協力する特色として、詳細に描写するのである。Melville は勿体ぶった様子で警告する。

“Now, mark, unerringly impelling this dead, impregnable, uninjurable wall, and this buoyant thing within; there swims behind it all a mass of tremendous life … all obedient to one volition, as the smallest insect … Unless you own the whale, you are but a provincial and sentimentalist in Truth.” (“The Battering-Ram” pp.285-286)

(さあ注目しろ、この生命のない難攻不落の、損傷を受けることのない壁を、まごうことなく押し進めているのを、そしてこの内部の浮揚するものを！この壁の背後には、巨大な生命の塊りが泳いでいる…全体が一つの意志力に従うのだ、小さい虫のように…もし鯨を所有していなければ、‘真理’については、たゞの田舎者で感傷家に過ぎないのだ。)

自然は、人類に対する神の怒りを証言するという信念を教えこまれた者にとっては、自然神学 (natural theology) の感傷性 (sentimentalism) を探知することは容易であった。原罪の教義を弁護するために、カルビニズム正統派の賛美歌作者 Issac Watts は、Paley の手法をくつがえし、神の立腹 (divine displeasure) を示す自然の証明 (natural proofs) を主張する長い論文を書いた。(Issac Watts. “The Ruin and Recovery of Mankind,” in Works, ed. D. Tennings and P. Doddridge, 6 vols. (London, 1753), VI. 195) 「もしこの世で、人間が罪を犯していなかったすれば、獐猛で暴れまわる、破壊的で血塗られた歯や爪で武装した熊や虎、狼やライオンなどがこの世の中に存在していたであろうか。」²²⁾

自然神学の博学な愚かしさ (the learned fatuity) は、Samuel Enderby に乗船している医師が、Ahab が Moby-Dick の獐猛さについて抱いている暗い確信 (dark convictions) を思い切らせようとする時に、諷刺的になっている。

“Do you know, gentleman, that the digestive organs of the whale

are so inscrutably constructed by Divine Providence, that it is quite impossible for him to completely digest even a man's arm? And he knows it too. So that what you take for the White Whale's malice is only his awkwardness" ("Leg and Arm" p.368)

(鯨の消化器は、神慮によって人知で測り知れないように造られているから、人間の手を消化することは全くできはしないということを知っているかい？ 鯨もそれは知っているのだ、だから白鯨の悪意だとあんたが思っているのは、あいつの弱点に他ならんのだ、)

Paley は自然現象で、全く博愛な創造主と調和し難いものがあると認めざるを得なかった。サソリ、鮫、ウルシ、などが存在することを認めて、恵み深い証拠 (benign evidences) が多い (plurality) ことが、神の道德についての最終的決定 (final decision) を左右すべきであると答えた。「我々が全ての現象を (神の) 博愛なる意図に帰することができる時には、少数を捨て、多数を取るのである。」 (Paley p.246)

神の勘定 (God's account) には、借り方 (debits) があるように思えるかも知れないことを認めながらも、貸し方 (credits) の方がはるかに上廻っていることを、Paley は主張し、Melville の "Paley の会計哲学" (Paley's counting-room Philosophy) に対する嫌悪を理解できるようなやり方で、問題になっている疑問を些細なことだと言ったのである。

Paley の '博愛' (benevolence) についての主張で、最も簡明な亀裂 (the most succinct crack) は、死んだ鮫のあごが、けいれんして Queequeg の手を深く切った時に示される。

"'Queequeg no care what god made him shark,' said the savage, agonizingly lifting his hand up and down; 'wedder Fejee god or Nantucket god; but de god wat made shark must be one dam Ingin'"

("The Shark Massacre" p.257)

('クィークウェーグは、どんな神が鮫を作ったか、どうでもよい' と痛そうに手を上下に振りながらこの未開人は言った、 "フィヂーの神だろうと、ナンタケットの神であろうとかまわれないが、鮫を造った神は、呪われインジンに違いない。)

受けるに値しない苦痛 (undeserved agony) が加えられた時に、比較的気持ちの良い経験 (more agreeable experiences) が多い (plurality) ことが、人知を越える力の '博愛' (benevolence) の存在についての信念を十分に支えることはないのである。

新しい科学的知識の流入が、カルビニズム正統派の信仰を分裂させたけれども、その正統派の信仰は、キリスト教の伝統を比較的自由に解釈し、道徳的精神を "博愛" (benevolence) の基準に従って覚醒させようとした改進黨的な人達によって、道徳生活の新しい基

盤の中へうまく吸収されなかったのである。Melville にとっては少くとも、改進黨 (liberals) の信条も十分とは言えなかったのである。古くからの信仰を破壊するそんな並外れた力を持つ“事実” (facts) は、人間が、道徳的是認と導きをそれらの中に見出す種類の、建設的で、総合的な傾向を与えられているとは、Melville には思えなかったのである。

メカニズムを示す証拠は、目に見える世界の創造主は、知力を持つという見解を支えていると思われたが、それらの証拠は、道徳外の知性 (amoral intelligence) を示唆するだけであった。Paley の有名な主張を思い起させる用語で、Melville は Hawthorne に自分の不安 (misgiving) を表明した。「多数の人間が神を恐れ、心の底では神を嫌う理由は、神の心に不信を抱いていて、神は時計のように全身これ頭脳だと想像しているからです」 (“The reason the mass of men fear God, and *at bottom dislike* Him, is because they rather distrust His heart, and fancy Him all brain like a watch” (Letters, p.129)

人間の人格的存在 (personal existence) は、道徳の存在しない秩序の生界 (a world of amoral order) の中では、神の命令 (God's decrees) によって支配されている世界におけると同様に厳しい脅威を受けるのである。

Ahab は、自分に対する永遠の断罪の宿命的過程 (the necessitarian processes of his own damnation) についての妄執 (obsession) によって、非人格的自然法が支配する宇宙 (a universe of impersonal natural law) に捕えられ人間のそれに似た叫びを口にするのである。これは、Ishmael と Ahab の間にある血縁関係 (kinship) のより深い要素である。神の専制 (tyranny) の下にある Ahab は、戦うべき敵 (adversary) を持っていると感じているが、一方、Ishmael は、自分を無力にし、滅ぼしてしまうような無関心 (paralyzing, annihilating indifference) に脅やかされている。Ahab は、憤り始め、時には、自分が打ちかかる白い壁の向うには、何も無い (naught) と感じていることを口にする (“The Quarter-deck,” p.144)。この衝動は、“The Candles” の中でも又瞬間的な表現で表われる。

“In the midst of the personified impersonal, a personality stands here.” (p.417) (人格化された、人格のないものの只中に、一つの人格が立っている)

Ishmael も、想像力が気まぐれに、誤った方向へ連れて行くことと、“事実”の世界の不毛の非人格性 (barren impersonality) の二つに同じ程に絶望して、Ahab の抑えられない戦い (quenchless feud) は、実際に、自分自身の戦いであるという確信に至るのである。

Ishmael の悩みのこれら二つの面は、Ishmael が地球そのものの丸さの中に読み取る相関係な前兆的な意味 (correlated portents) によって示されている。想像力が、真実であるもの (what is real) への明確な行程 (a definite course) を、信頼できる導き手によって与えられない時の役立たずなこと (futility) を表現しながら、思いにふける。

“Were this world an endless plain, and by sailing eastward we could for ever reach new distances ... then there were promise in the voyage. But in pursuit of those far mysteries we dream of, or in tormented chase of that demon phantom that some time or other, swims before all human hearts; while chasing such over this sound globe, they either lead us on in barren mazes or midway leave us whelmed. (“The Albatross” p.204)

(この世界が涯しない平原で、東へ向って航海すれば、常に新たに距離を伸ばして行けるとすれば、…航海にも希望があった。しかし、我々が夢想する神秘を追いかけ、時々全ての人間の心の眼前を泳ぐあの悪魔の幻しを苦しみながら追うのであれば；この丸い地球を、そんなものを追いかけている間に、それらは、我々を不毛の迷路へ連れ込むか、途中で我われを海の中へと沈めるだろう。)

この世界は、自己増殖する思索 (self-generating speculations) の世界ではない；この地球の丸さは、想像力を元の位置へ戻すのである。同じ表象を使って、Ishmael は、空想への手掛かりがない世界の不毛さ (barrenness) を表現する。

“And some certain significance lurks in all things, else all things are little worth, and the round world itself but an empty cipher, except to sell by the cartload, as they do hills about Boston, to fill up some morass in the Milky Way.” (“The Doubloon.” p.358)

(全てのことには、何かの意味が潜んでいる。さもなければ、全てのものは殆ど価値がない。そして丸い地球そのものもただ空っぽの暗号だ。ボストンの高台辺りをやっているように、銀河の沼地を埋めるために押し車一杯いくらで売る以外には、何の役にも立たない。)²³⁾

アハブの変身 (Ahab Transfigured)

T. W. Herbert は、この章の書き出しを、「Ahab がその目的に対して monomaniac であり、そのエネルギーと知力を、たゞ一つの目的に集中して、狂気と化した theocentric piety の表象となる」という表現で始めるが、‘theocentric piety run mad’の意味を拡大すると、Ahab が遂には、狂気の果に自らを神と同一視する、つまり神との合一という変身 (transfiguration) を遂げるということになる。

Ahab は、自分を断罪した神に対しての piety は、反逆という敬い (defiant worship) であると確信する。Ahab を断罪した神を白鯨の内に見出して、断罪された全人類の代表として、復讐の追跡に向うことで乗組員を説得するが、その時、自らを神と合一させるという変身を装うのである。しかし、それは、Ahab が復讐しようとしている反逆の敬いを捧げた悪意の神の手先になることでしかなかった。最後には自らのみならず、乗組員全て

を滅ぼしてしまう結果を迎える。Herbert は、このAhab の変身を中心にし、Ahab の道徳的退廃 (moral deterioration) までを論じている。

<Ahab's defiance to divine malice>

『Melville は、Ahab の苦悩 (agony) を、Ahab の目的 (白鯨への復讐) の一貫性が、その道徳的正当性を持たなくなっても依然として掲げられているという重大な局面にまで至らせるのである。Melville が、Ahab の苦しみ (torment) と変身 (transfiguration) を定義する用語は、Ahab が究極に意味することにとって、重要である。というのは、これらは、Ishmael が直面するようになるデレンマを詳細に述べ、Ishmael が最終的に解決しなければならない問題を提起するからである。

Ahab は、自分に対する永遠の断罪から、それを命じた神の悪意 (divine malice) に対する途方もない反抗 (gigantic defiance) を作り上げるのである。復讐心に燃えて、狂気と怒り (madness and tury) を倍増しながら、自らの運命の根元に打ってかかるのである。もしも、白鯨が自分に対して向けられた究極的悪意のしるし (sign) であるなら、それは同時に、彼の復讐の手段になり得る。白鯨の内における神の存在は、白鯨を神聖にし、神が顕現する対象となる。秘跡の行い (sacramental act) で、火が Ahab を焼いたように (“The Candles” p.416)、白鯨は Ahab を不具しにし、Ahab が神を冒瀆する意識的行為 (conscious act of desecration) によって、自分の完全さ (integrity of his own being) を主張する機会を与えたのである。

Ahab は、この奇妙な仕返しを Starbuck に説明し、太陽であれば、自分を侮辱すれば打ち返すだろうと主張する；「何故なら、太陽にそれができるならば、俺だって相手にそれができるだろうからだ。それには、一種のフェアプレイがあるからだ」 (“For could the sun do that, then could I do the other; since there is ever a sort of fair play herein” “The Quarter-deck” p.144)

Ahab は、自分の白鯨に対する憎悪が、冒瀆的狂気 (blasphemous madness) だと Starbuck が解釈している理由は、理解しているが、自分の狂気は“狂った狂気”(maddened madness) であると宣言する。そして自分の足を喰いちぎった奴を切り刻む (dismember my dismemberer) という決意を奮い起すのである。Melville の Ahab は、聖書の Ahab が断罪の宣告の事実と関係のない軍事行動で死んだのだが、それと対照的に、Ahab の終末を要求する恐るべき力と直接対面する探求に乗り出すのである。この Ahab は自分の壮大な敵 (cosmic adversaries) に向って、自らが命じたのだから、Ahab の復讐は避けられないと主張して、嘲けるのである。「出て来て、よけられるかどうか見てみる！ よけられるだって？ よけられはしないぞ、よけたら自分をよけるだけだ。ちゃんとそこにいるのはわかっているんだ。」 (“Come and see if ye can swerve one. Swerve me? ye cannot swerve me, else ye swerve yourselves! mark has ye there” “Sunset” p.147) かくして Melville は、Ahab の反抗的自己主張の核心に一種の両義性

(ambiguity) を置く。つまり Ahab 自身の目的は、同時に Ahab 自身の予定された運命のコースである。「俺の不変の目的へ通じる道は、鉄のレールが敷いてあって、俺の魂がその上を走るようにはめこんであるのだ。」(“The path to my fixed purpose is laid with iron rails, whereon my souls is grooved to run” “Sunset” p.147)

Melville は、Ahab の探求を入念に述べるカルビニズの参照体系の枠組によって、この両義性を並外れた深さと微妙さで描いている。

Calvinism の神は、“author of sin”として糾弾されただけでなく、同時に、そのような神の下では、人間は道德上の代行者 (moral agent) では有り得ないという非難があった。もしも人間の永遠の運命や日常の行動が、世界創造以前に与えられた命令 (decrees) によって決定されているとすれば、人間の生涯は、既に決定されていることから生じる‘単なるからくり’ (“mere mechanism”) になってしまう。人間の‘自由’ (“freedom”) を支持する改進黨の抗議は、神の主権についてのカルビニズムの見方は、人間の行為から全ての意味を漂白してしまうこと、又その見方は、自我の道德的実体 (moral tangibility of the self) を分解するという認識によって、力あるものになっている。Melville は、Ahabの行動が真に自らの行動であるかどうかという疑問を考えるために、Ahab の自己主張を描くのである。劇的に表現されていることは、Ahab が自分の生涯に対して自分の権利を主張しようとする戦いである。

Calvin は、旧約の Ahab が悪魔の犠牲になることを取り上げることができる故に、有益だと思ったのである。(John Calvin, Calvin's Calvinism, frans. Henry Cole (Grand Rapids, 1950), pp.195, 240, 288, 321. Institutes of the Christian Religion, ed. John T. Mcneil, trans. F. L. Balltes, 2 vols. (Philadelphia, 1960), I, 176, 219, 230, 620, II,1170)

Calvin は、神の Satan に対する支配を具体的に示すと思われる部分を引き合いに出しているが、摂理による神の創造の命令は徹底的であるという主張を支えるためであった。Ahab を自殺的な戦いに駆り立てるために神は Satan にそうするよう命じる。(“Gods sends Satan to Ahab, with his own Divine command that he should be a ‘lying spirit in the mouth of all the king’s prophets” thus the imposter spirit becomes the minister of the wrath of God, to blind the wicked.” (Calvin, Calvin's Calvinism, p.240) (神はサタンをアハブのもとへ遣わされる。サタンは王の全ての予言者の口を使って偽りを言う霊であるというのが神の命令である。かくして、偽りの使者 (impostor spirit) は、邪悪なる者を盲目にする為に、神の怒りを司る存在になる)。Calvin にとって、神はアハブを罰するためにサタンを使われたのであって、勿論神に何の有責性 (culpability) は無いのである。

Melville は、Fedallah が、Captain Ahab を陥れるために悪の神 (an evil God) が遣わされた詐りの使者 (impostor spirit) であることを示すために、この Calvinist の

教えの要素を逆転させている。Parsee を導入する極めて冷笑的で遠まわしな一節は、両者の関係のこの部分をほのめかしている。

“Whence he came in a mannerly world like this, by what sort of unaccountable tie he soon evinced himself to be linked with Ahab’s peculiar fortunes; nay, so far as to have some sort of half-hinted influence; Heaven knows, but it might have been even authority over him; all this none knows”

(“Ahab’s Boat and Crew. Fedallah.” p.199)

(どこからこの男はこんな礼儀正しい世界にやって来たのか。どんな説明もつかない縁で、Ahab の運命と結びついていると、直ぐにあいつは明らかにしたのか。いや、或るぼんやりとした影響力を持つ程にだが、神様には分かっていることだが、それは Ahab を支配する様になっていたかもしれない。こんなことは誰も知らない)。

この後で、Melville は、その Calvinist の教えにはっきりと一致するヒントを与えている。

“Ahab seemed an independent lord; the Parsee but his slave. Still again both seemed yoked together and an unseen tyrant driving them”

(“The Hat” p.439)

(Ahab は自律した主君のようであった。Parsee は、彼の奴隷であった。それでも両者は、くびきでつながれているようであった、そして目に見えない暴君が二人を追い立てているようであった。)

Fedallah は、姿の見えない暴君の代理人であって、Satan を遣わす悪の仕事には加担しない a holy God の使用人ではない。しかし Melville は、Fedallah も又、Ahab の自らが決定する目的 (Ahab’s own determining purpose) を投影するものであることを示唆する；この両者が、“じっと見詰め合い、まるで Parsee の中に Ahab は自分の不吉な影をみとめ、Ahab の中に Parsee は自分の棄てた中味 (abandoned substance) を見ているかのよう” (“The Hat” p.439)。

この奇妙な影と実体の分離 (this peculiar divorce of shadow and substance) と、神の支配 (divine overruling) を示唆するものは、Ahab 自身の本質を特徴づけている。そしてその事は、この一節が結ばれる時に、明らかになる。

“For be this Parsee what he may, all rib and keel was solid Ahab,”

(“The Hat” p.439)

(このペルシーが何者であろうと、胸骨と竜骨は実体のある Ahab なのだ)』²⁴⁾

<Indwelling Sin>

『Ahab の宿怨 (inveteracy) の内面的作用を分析するために、Melville は罪 (sin) を人間の生涯を支配する、異質の専制者 (alien tyrant) というカルビニズム正統派の性格付けを採用する。John Owen's 'Indwelling Sin' (内在する罪) は、'罪人をその体内に宿るもの (an occupying presence) の犠牲者 (victim) である' と提示している。罪の力 (the power of sin) は、それが人間の本性に与える暴力 (violence) の中に現われる。神から授かった理性的本性 (reasonable nature) に逆って、その力は人間を罪に向わせる。Owen は、罪人の苦闘を、Calvinist が精神的再生 (spiritual rebirth) の過程を描写するのに用いる心理的理論に従って述べている。Owen は、原初の理性的本性 (original rational nature), 即ち墮落以前に創られた神が抱いていた人間像が、罪に従いながら傷つき、縮小した姿で生き延びるのであると断定している。

この Owen の説に相応して、Melville は、Ahab の "great natural intellect" (偉大な本性的知力) は、片足を喰いちぎられる前は、彼の内部で生命をもって働くものであった、しかしそれ以後は、Ahab の狂気の道具 (the instrument of madness) になったのであると言う。Ahab の狂気は、不法に暴力をふるう専制者のようなもので、("stormed his general sanity, and carried it, and turned all its concentrated cannon upon its own mad mark," "Moby-Dick" p.161) 「全体的な正気に襲いかかり、それを制圧し、その集中砲火をその狂気のしるしに向けた」のである。

かくして眠っている時、Ahab の理性的魂 (rational spirit) は、それを力づくで服従させてきた狂気の目的から自由になろうと闘うのである。

"Ahab's rational spirit spontaneously sought escape from the scorching, contiguity of the frantic thing, of which, for the time, it was no longer an integral" Ahab's purpose had "by its own sheer intervacy of will, forced itself against gods and devils into a kind of self-assumed, independent being of its own. Nay, could grimly live and burn, while the common vitality to which it was conjoined, fled horror-stricken from the unbidden and unfathered birth" ("The Chart" p.175)

(Ahab の魂は、狂気じみたことが身を焦がすような連続から自発的に逃げようとした。というのは当座の間は、彼の魂はその狂気じみたものの総体では最早なかったからだ。Ahab の目的は、意志の持つ全くの執念によって、神や悪魔と対立し、結局は一種の僭主的、独立した存在になってしまった。いや Ahab の目的は、冷酷に生き、燃え上がることができるのでそれが結合していた共通の生命力は、求められていない私生児の誕生から恐れをなして逃げだしたのである。)

Ahab が精神分裂 (psychic disintegration) の苦しさに、船室から呻きながら飛び出

してくる時、Melville は、Ahab が一時的に‘もぬけの殻’ (a vacated thing) であったと言うのであるが、それ程、理性的半身に彼の中に残存しているものが求める絶縁は徹底したものであった。

Ahab が狂気の目的によって犠牲になったのは、自らの禿鷹を創り出したプロメテウスの苦しみであった。プロメテウスの知的渴望は、プロメテウスの苦しみと不可分に結び付き、その苦しみの中にしか存在し得ないのである。

Jonah の罪 (guilt) が、それから逃れようともがくことで一層重くなる様に、Ahab の怒り (rage) は、努力と苦しみが一体となっている内面的な狂乱 (an inner furor) である。John Owen は、「罪人の心は、いわば地獄の上部に在る、というのは、それは墮落、恐怖そして混乱 (filth, terror and confusion) の故に、地獄の入口に隣り合っているからだ」と言明する。Melville は、Ahab の魂の恐怖を描く時に、この John Owen の地獄についての概念の中の道徳理論に対して十分な理解を示している。

“a chasm seemed opening in him, from which forked flames and lightnings shot up, and accursed fiends beckoned to leap down among them: when this hell in himself yawned beneath him, a wild cry would be heard through the ship” (“The Chart” p.174)

(深淵が内側で口を開いているように思えた。そこからいくつにも分れた焰や雷光が飛び出してきて、呪わしい悪鬼が手招いていた。この内なる地獄が彼の足元で大きな口をあけると、野叫びが船中に聞えたものだ。)

<Transfiguration or inner unity>

Ahab を脅かす内面の混沌 (inner chaos) は、最終的には、Ahab を屈服させない。むしろ逆に Ahab は、神との忘我的な接触 (ecstatic contact with the divine) によって、内面の不統一 (inner disunities) を調和させるのである。“The Candles”の章で、神、自然、そして自らの内面的生活の三者に対する観念が、冒瀆的な、Ahab を神聖化する火に焼かれて、Ahab は、その曖昧さを取り除かれるのである。つまり‘変身による統一’ (transfigured coherence) を遂げるのである。

Melville は、この Ahab の精神の drama を、正統派の「再生」(rebirth) の図式によって整えるのである。その再生の図式の中で、人間の自由と神の全てを決定する意志 (human freedom and God’s deterministic decrees) との間の矛盾と思われるもの (apparent contradiction) は、解放されたのである。Calvinism の理論によれば、神が選ぶ者は、自分達の自由は、神に従うことによって完全になる (their freedom is perfected in obedience) ことを発見する。精神的再生 (spiritual regeneration) は、神が自らのイメージによって創造した人間の原初の本性を回復する、そして罪の専制 (the tyranny of sin) から解決するのである。かくして、再生した神の子は、自分の最も真なる本性を生き抜くことができる。その人間は、神の恩寵 (grace) によって、全心を挙げて神に

尽すことができるというのである。Father Mapple が、神の摂理 (the dispensations of the Almighty) に従うと宣言する時、彼の不動の半身 (inexorable half) の持つエネルギーを動員するのである。

Pequod 号のマストから立ち昇る‘三位一体の焰’ (trinity flames) の前に立って、Ahab は自分が戦っている精霊の力 (the power of spirit) を認めるが、その力が自分を圧倒することはないと宣言する。

“I own thy speechless, placeless power: but to the last gasp of my earthquake life will dispute its unconditional, unintegral mastery in me, ... while I earthly live, the queenly personality lives in me, and feels her royal rights” (“The Candles” p.417)

(汝の言語を絶する、空間を越える力を認める、がしかし、俺の揺れ動く人生の最後の息を引取るまで、汝の俺に対する無条件で、不完全な支配に抵抗してやる、…俺が地上に生きている限り、女王のような人格が俺の中に生きていて、王者の権利を感じているのだ。)

Melville は、人格の王者としての権利 (the royal status of the personality) を、改進黨のキリスト教理論に従って定義している。それは、人間は崇めて従うべく与えられるものの正当性を疑問視する権利を持っているというものである (men have an inherent rights to question the justice of whatever offers itself for worshipful submission)。

William E. Channing²⁵⁾ が、「人間の尊厳は、我々内部の、ある原理に基くものであって単なる力の前にひれ伏すことを禁じる」 (“human destiny rests on a principle within us, which forbids us to prostrate ourselves before mere power.”) と断言したように、Melville は、焰の中の精霊に向かって呼びかける。

“Come in the lowest form of love, and I will kneel and kiss thee: but ... come as mere supernal power: and ... there’s that in here that still remains indifferent” (“The Candles” p.417)

“汝の最も低い形の愛で来るのなら、膝まずき接吻しよう…しかし至高の力としてやって来るなら。…ここには、依然として知らぬ顔をするものが残っている。)

Ahab は、服従する崇拜 (the worship of submission) を差し出すことができない。別の形の崇拜 (worship) を抱いているのだが、それは Channing が想像しなかったものである。もし神が、ただ滅すためだけに反逆的な人間を不当にも創造するのであれば、その人間は、その神に対して、その運命にふさわしい崇拜を捧げることができる。「愛にも敬いにも、汝は親切でない。そして憎しみに対しても、汝はたゞそれを殺すだけだ。そして全てが殺されるのだ」 (“To neither love nor reverence wilt thou be kind: and

even for hate thou canst but kill: and all are killed” (“The Candles 417”), それ故に Ahab は、自分にとって「ふさわしい崇拜は、反逆である」(right worship is defiance) であるという、怒りに満ちた確信に至ることによって、自分自身を最も正しく深く表現するのである。その反逆的崇拜において、Ahab は、自らの内にある地獄の劫火(hellfire)を、自分に対して向けられていると自分で確信し、それに応える怒りの地獄の劫火とを結び付けることができる。そして、真に自分自身の目的であり、同時に自分の人生がはめ込まれている究極的な状況と調和している目的を追求することができるのである。

“Oh, thou clear spirit, of the fire thou madest me, and like a true child of fire, I breathe it back to thee” (“The Candles” p.417)

(澄みわたる霊よ、汝は、汝の火から私を作った。そして真の子のように汝にこの火を吹き返してやる。)

神に選ばれた者(the elect)が、神の命令(divine decrees)に従うことによって人生での自由を見出すのに反して、見棄てられた者は(reprobate)は、自らの最大の充足(deepest fulfilment)を反抗(defiance)に見出すのである。かくして Ahab は神との合一(unification with the divine)を喜ぶのである。

“I leap with thee; I burn with thee; would fain be welded with thee; defyingly I worship thee!” (“The, Candles,” p.417)

(俺も汝と共に跳ぶ、共に燃える、喜んで汝と一つになろう。汝に反逆しつつ、礼拝してやる。)

神に選ばれた人間(“the elect)が、絶えず反抗(defiance)を示したくなるように、Ahab は悔い改めて、自分の探究を押し進める狂気の憎悪(the mad hatred)を棄てたいい気持になるのである。Pip の Ahab に対する忠誠と愛情がそれ程の影響を持つのである。Ahab は、Pip に言う。「お前の中には俺の病いを癒してくれるものがある様に感じる。似た者が似た者を癒す。こうして白鯨を追いかけていくのには、この病が最も望ましい健康になるのだ。」(“There is that in thee, poor lad,” says Ahab which I feel too curing to my malady. Like cures like; and for this hunt, my malady becomes my most desired health.” (“The Cabin” p.436)

“The Symphony” の章で、Ahab の運命づけられた行程との苦闘は、痛烈に扱われている。昼間(the day)の美しさが Ahab を感動させる；

“That glad, happy air, that winsome sky, did at last stroke and caress him; the step-mother world, so long cruel — forbidding — now threw affectionate arms around his stubborn neck, and did seem to joyously sob over him, as if over one, that however wilful and erring, she could yet find it in her heart to save and to bless. From beneath his slouched hat Ahab dropped a tear into the sea; nor

did all the Pacific contain such wealth as that one wee drop”
 “The Symphony” p.443)

「あの喜ばしい幸福な大気、晴れやかな空が、遂に彼を優しく撫で抱擁したのだ。これまで残酷で入るのを禁じていた継母の世界が、今は彼の頑固な首に愛情に満ちた腕を廻し、彼を抱いて喜びながらすすり泣いているように思えた、まるでどんなにわがままで誤り多い子であっても、まだ心では救って祝福することができるかのように。目深にかぶった帽子の下から、Ahab は、一滴の涙を海に落した。そしてその一滴の涙ほどの富は大平洋にはなかったのである。」

この Ahab の涙を、寡婦の小銭 (Mark 12 : 41~42) に暗示的にたとえているのは、その涙が Ahab の魂の火で焦げついた内部に残されている悔悛 (repentence) の全てを表わしていることを示唆している。この場面は、カルビニズムは、断罪された者に救いの偽りの約束 (a false promise) を差し出す神を考えているのだ、という改進黨の神学者の非難を背景に置いてみると、愕然とする力を帯びるのである。「神に見棄てられた者 (the reprobate) は、神の許へ戻るように呼びかけられる、悔い改めるように…誰もこの呼びかけのどれにも従うことは全くできなかつた。しかしながら、従わないが故に、拒む度毎に、断罪は増大する。これ程恐ろしいことがあろうか！ 悪魔的残酷でもここまで想像される以上の悪意 (malevolence) を示すことができようか？ あらゆる慈悲 (mercy), あらゆる呼びかけ、あらゆる良いと思われるもの全てが、哀れで惨めな犠牲者を、消えることのない永劫の断罪の火の中へ一層深く沈めるように仕組まれているのだ。宇宙の栄光の神 (glorious God of universe) よ、その本性は愛であるのに、その性格の何という表現であろうか。——その哀れで惨めな人間に、善に似て何も中味の無いものを差し出す、しかし、当然、そんなものを彼等が手にすることは不可能である。恐ろしい、恐ろしい、恐ろしい (dreadful!) 偉大なる天の霊よ！ 汝はこんなにも恐るべき怪物なのか！」 (R. S. Foster, *Objections to Calvinism*, p.99)

Starbuck は、美しい景色に感動して Ahab に妻子を思い出した追跡を放棄するように懇願する。Ahab は一瞬気持ちが和らぐ。自分自身に対する自然な愛情が目覚めたのである、彼の狂気が従えてきた理性的魂 (rational soul) が突然姿を現わすのである。(John Owenは、罪の力によって乱されている人間の創造された本性の一つの衝動として、子供に対する愛情 (affection) を論じている。) しかし、その衝動は抑えられる。Ahab が、陰うつに、この輝かしい日は、自分にとっては、救いの示唆はあるが、身の毛のよだつような偽瞞であったと断言するからである。

“What is it, what nameless, inscrutable, unearthly thing it is: what cozening, hidden lord and master, and cruel, remorseless emperor commands me; that against all natural lovings and longings, I so

keep pushing, and crowding, and jamming myself on all the time, recklessly making me ready to do what in my own proper, natural heart, I durst not so much as dare?" ("The Symphony." pp. 444~445)

「何だそれは、名もない測り知れぬ、この世のものでないこれは？ 何という人を欺き、姿を見せぬ君主で主人、そして残酷で良心のとがめを感じぬ帝王が俺に命令している；全ての自然の愛や憧れに背いて、俺に強引に進めと、そして、常に俺に押しよせて押し潰せと；無謀にも俺がとてもできそうにもないことを、自分にふさわしい自然な心でさせようとしている。」

Ahab の目的は、こうして再び“犠牲化” (victimization) として表現される。Ahab は今や明らかに、カルビニズムの神慮 (providence) と結び付いている言葉を使って、自分の主張が陥っている苦境を述べる。

"Is Ahab, Ahab? Is it I, God, or who, that lifts this arm? But if the great sun move not of himself; but is as an errand-boy in heaven; nor one single star can revolve, but by some invisible power; how then can this one small heart beat; this one small brain think thoughts; unless God does that beating; does that thinking, does that living, and not I" ("The Symphony." p.445)

「Ahab は Ahab なのか。この腕を持ち上げるのはこの俺か。神か、誰だ？

しかし、もし偉大な太陽が自分で動くのではなくて、天界の使い走りに過ぎないとすれば、星が一つとして不可視の力でしか動かないとすれば、どうしてこの小さな心臓が鼓動を打ち、この小さな頭脳が物を考えたりできよう；もし神がその鼓動をさせ、その考えごとをさせなければ、生かしてくれなければこの俺も生きてはいない」

Ahab は、Starbuck に、神に対する根本的な告発 (so drastic an indictment of God) の意味を考えてみるように挑む；「人殺しはどこへ行くのだ。裁き人が、法廷へ引出される時に、誰が裁かれようか？」 ("Where do murderers go, man? Who's to doom, when the judge himself is dragged to the bar?" "The Symphony" p.445)

白鯨を追跡中の 2 日目後で、Ahab は、自分を断罪した神の力ある命令を引き合いに出して、Starbuck の敬虔な忠告を黙らせる。“The Candles” の章における様に、Ahab の壮大な怒り (cosmic fury) は、理性的本性の衝動 (the impulse of his rational nature) と、探求の狂気 (the madness of quest) との分裂を克服する。Ahab は、再び内的統一 (inner unity) を主張するが、それは、断罪が創造以前の永劫 (eternities prior to creation itself) の中で定められている人間の本来の姿 (integrity) としてのものである。

"Ahab is for Ahab, man. This whole act's immutably decreed.

‘Twas rehearsed by thee and me a billion years before this ocean
rolled. Fool! I am the Fates’ lieutenant; I act under orders”
 (“The Chase-Second Day” p.459)

「Ahab は永遠に Ahab だ。この一幕は全て不変なものとして神に定められている。この大海原がうねり始める10億年も前に、俺と汝とで下稽古されたのだ。愚か者！俺は運命の副官で、命令に従って行動するのだ。」

カルビニズム正統派が、救済の神に服従することによって真の男らしさ (true manliness) を達成することを主張するように、Ahab は個人の尊厳を主張しながら、自らを断罪した神に対して、避けがたいサタンの服従 (Satanic obedience) を主張するのである。

超絶的な存在 (the Beyond) と接触する時に拡大されて、Ahab の悪魔的なエネルギー (demonic energy) は、乗組員を畏怖させる程の精神の発達に寄与したのである。しかし、Ahab のエネルギーが段々と張烈になるにつれて、Ahab は、道徳的に忌避される存在になる。Ahab の壮大な悪 (cosmic evil) との闘いは、その雄大さ (heroism) にも拘らず、それ自体が悪を生むのである。その結果、Ishmael は、Ahab に対する忠誠 (allegiance) から身を引くのである。そして一層大きさを増した不確かさ (uncertainty) という重荷を背負って自分の探求を続けるのである。

Ahab の巨人的力 (titanic force) と、Starbuck の「神の助けのない徳目、或いは正しい心に過ぎないものの不能」 (“incompetence of mere unaided virtue or right-mindedness in Starbuck” (“Moby-Dick” p.162) との対照は、Ahab が読者に与える強い感動と、Ahab の悪とを示すものである

Starbuck の墮落 (degradation) は、『偉大な民主的神 (great democratic God) の存在を信じる可能性について Ishmael が抱いていた初め頃の疑念を、一層深めようとした魂の勇気の没落 (the fall of valour in the soul) を劇的に表現している。』²⁶⁾

T. W. Herbert は、Starbuck が Captain Ahab の狂気の探求を止めることができないで黙従することになるが、それは Starbuck の『勇氣ある正しい心 (courageous right-mindedness) が、自ら命ずることを果し得ない、そして神による強化 (divine reinforcement) を受けないので、Starbuck は、Ahab の手の内にある哀れな道具 (hapless utensil) になる』からであると述べ、Moby-Dick との最後の対決は、Starbuck の男らしさの破滅 (the devastation of manliness) を仕上げると結ぶ。以下、Ahab の道徳的退廃について、King Herod との結び付きで論じ、Ahab が神の悪意の共犯者 (an accomplice of divine malice) になり、復讐しようとする悪の拡大に加担するとして、この章を結ぶ。この部分、これに続く章の “Ishmael Adrift,” “Conclusion”, そして、T. W. Herbert の “Moby-Dick and Calvinism” についての考察は、次回に掲載したい。

引用文献

Moby-Dick and Calvinism, A World Dismantled ; T. Walter Herbert Jr.
Rutgers University Press
New Brunswick, New Jersey 1977

(同書の中で引用されている作品)

Moby-Dick. ed. Harrison Hayford and Hershel Parker (New York, 1976)

(注)

- 1) Moby-Dick and Calvinism pp.89-90
- 2) *ibid* pp.91-98
- 3) *ibid* p.116
- 4) *ibid* p.117
- 5) *ibid* p.118
- 6) *ibid* p.118
- 7) *ibid* p.119 (Footnote: Edward Reynolds, Works, 6 vols (London 1826)
- 8) *ibid* p.120
- 9) *ibid* p.120
(footnote: John Owen, "A Dissertation on Divine Justice" in Works, ed. William H. Goold 16 vols (London 1967) Owen's works were a durable staple of Calvinist teaching. The Magazine of the Dutch Reformed Church, 3 (April 1828-March 1829), referred to him as the "prince of theologians.")
- 10) *ibid* p.121
(footnote: John Owen, The Nature, Powere, Deceit and Prevalency of Indwelling Sin in Believers. p.91)
- 11) *ibid* p.121
(footnote: John Calvin, Institutes of the Christian Religion ed. John T. McNeil, trans. F. L. Battles 2 vols.)
- 12) *ibid* p.121
(footnote: The New Testament ... The Book of Psalms (New York 1844) Sealts. No 65)
- 13) *ibid* p.122
(footnote: John Calvin, Calvin's Calvinism trans. Henry Cole pp.126-127
This volume contains Calvin's Polemical treatises' "The Eternal Predestination of God" and "The Secret Providence of God".
- 14) *ibid* p.123
- 15) *ibid* p.125
(footnote: John Taylor, The Scriptural Doctrine of Original Sin, Proposed to a Free and Candid Examination (London 1746), P. 256 Sealts, No. 496. This book was of considerable importance in American religious thought. Jonathan Edwards attacked it extensively in the Great Christian Doctrine of Original Sin. (1758)
- 16) *ibid* p.124
(footnote: R. S. Foster, Objections to Calvinism (Cincinnati 1849) p.54
- 17) *ibid* pp.123-126
- 18) *ibid* pp.126-128
- 19) *ibid* pp.128-130

- 20) *ibid* pp.130-132
- 21) *ibid* pp.132-136
- 22) *ibid* p.137
- 23) *ibid* pp.137-140
- 24) *ibid* pp.141-145
- 25) *ibid* p.147

(footnote: William Ellery Channing, Works 6 vols (Boston 1849) I. 232

- 26) *ibid* pp.145-150

On Religious Influences on Herman Melville (4)

Masao OKAMOTO

Faculty of Liberal Arts and Science

Okayama University of Science

1-1 Ridai-cho, Okayama 700 Japan

(Received September 30, 1990)

In this study as the fourth publication of the same title, the writer's purpose is an attempt to gain a comprehensive understanding of the religious influences articulated in Herman Melville's works with focus on Moby-Dick.

In this paper, the writer traces the religious struggles while Melville was composing Moby-Dick, and studies the final outcome of those ideas and images Melville meant to tell his readers, following "Moby-Dick and Calvinism" by T. Walter Herbert Jr page by page. In short, this paper is no other than the interpretation of the above-mentioned book.